

小林方言の「一型アクセント」はどのように実現するか

佐藤, 久美子
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/9198>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 25/26, pp.164-188, 2005-11-30. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン :
権利関係 :



小林方言の「一型アクセント」はどのように実現するか

佐藤久美子
(九州大学大学院)

キーワード: 小林方言、一型アクセント、語彙語、フォーカス、DF

1. はじめに

小林方言¹は、尾高一型アクセント方言として著名な都城方言と同じく、宮崎県諸^{もろ}県方言の下位方言とされている。語と句を観察すると、小林方言では、名詞（助詞が後続する場合は「名詞+助詞」）、副詞、動詞、形容詞の最終音節で高いピッチが実現する。

ところが、文を観察すると、名詞、副詞、動詞、形容詞であっても、高いピッチが実現しない場合がある。本論文では、「フォーカス」と「DF (domain of focus)」という概念を用いることによって、小林方言において、高いピッチがどのように実現するのかを記述する。

2. 高いピッチの分布

2.1 語と句における高いピッチの実現

名詞の最終音節、名詞に助詞が後続する場合は、最後の助詞の最終音節で高いピッチが実現する。以下、高いピッチを上線で示す。

- (1) a. オハン あなた b. オハンガ あなたが
 c. オハンカラ あなたから d. オハンカラガ あなたからが

複合名詞の場合も (1)と同様に、最終音節で高いピッチが実現する。前

¹ コンサルタントは永田トシ氏と堀 緑氏である。両氏とも 1925 年生まれの生え抜きである。

部要素と後部要素、それぞれで実現することはない。

- (2) a. ナゴヤダイガッ / *ナゴヤダイガッ 名古屋大学
b. デンキガイシャ / *デンキガイシャ 電気会社

副詞の場合も、最終音節で高いピッチが実現する。

- (3) a. モッショイ² 夢中で b. ヤッパイ やはり

動詞の場合も、高いピッチは最終音節で実現する。

- (4) a. イゴッ 動く b. イゴカン 動かない
c. イゴタ 動いた d. イゴケバ 動けば

形容詞では、動詞と同様に最終音節で高いピッチが実現する。

- (5) a. ムゼ かわいい b. ムゼネ かわいくない
c. ムゼカッタ かわいかった d. ムゼケレバ かわいければ

動詞、形容詞に終助詞が後続する場合、高いピッチは終助詞の最終音節ではなく、「動詞/形容詞」の最終音節で実現する。

- (6) a. イゴタッオ / *イゴタッオ 動いたよ
b. ムゼカッタド / *ムゼカッタド かわいかったよ

(1)-(6)の観察に基づき、高いピッチの分布を、以下のように記述する。

² 小文字の母音は、二重母音の後半の母音であることを表している。従って、「イ」単独で音節を成すのではなく、(3a)では「ショイ」で、(3b)では「パイ」で一つの音節を成していると考えられる。

(7) 高いピッチの分布

高いピッチは語彙語の最終音節で実現する。

(「語彙語」とは、名詞 (+助詞³)、動詞、形容詞、副詞を指す)

複合動詞では、これまでに見られなかった高いピッチの現れが観察される。

(8) a. ノンハジムィ ~ ノンハジムィ 飲み始める

b. ツレモドス⁴ / *ツレモドス 連れ戻す

(8a)では、高いピッチは、前部要素「飲み」の最終音節でのみ実現する場合と、前部要素「飲み」の最終音節と後部要素「始める」の最終音節それぞれで実現する場合がある。一方、(8b)では複合語全体である「連れ戻す」の最終音節で実現している。これは、(7)に矛盾する例ではなく、(8a)と(8b)の複合語としての性質の違いに起因するということを示す。

動詞複合語について、益岡・田窪 (1992)は、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」を仮定し、それぞれ以下のように定義している。

(9) 「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」 (益岡・田窪 1992, p. 17, ll. 1-9 に基づく)

複合動詞の前項が受動形、使役形などの形式を取ることができる場合、それを「統語的複合動詞」と呼ぶ。それらの形式をとることができない場合、それを「語彙的複合動詞」と呼ぶ。

この定義に従うと、次の(10)に示すように、「飲み始める」と「連れ戻す」は異なる性質の複合語であることになる。

³ 名詞だけなら「名詞」が、名詞に助詞が後続していれば「名詞+助詞」が語彙語となることを表している。ここで言う「助詞」には、終助詞は含まれないとする。

⁴ 文字の下の点は、母音が無いことを表している。従って、「ス」単独で音節を成すのではなく、「ドス」で一つの音節を成していると考ええる。

- (10) a. 飲まれ始める/飲ませ始める
b. *連れられ戻す/*連れさせ戻す

「飲み始める」は前項が受動形の形式と使役形の形式を取ることができるので、統語的複合語である。一方、「連れ戻す」は前項が受動形も使役形の形式も取ることができないので、語彙的複合語である。このことから、「飲み始める」は二つの語彙語であり、「連れ戻す」は一つの語彙語だと考えることができる。従って、高いピッチの実現のパターンは、統語的複合語 (8a) で二通りあり、語彙的複合語 (8b) では一通りしかない、とすることができる。

複合名詞 (2) と語彙的複合動詞 (8b) において、高いピッチが複合語の最終音節で実現するのは、これらの複合語がレキシコンで形成されており、全体で一つの語彙語だからである。一方、統語的複合動詞において、高いピッチが前部要素の最終音節と後部要素の最終音節で実現するのは、これが統語論で形成されており、二つの語彙語から成っているからである。統語的複合動詞の前部要素だけに高いピッチが生じる場合については、4.1.2 節で取り上げる。

2.2 文における高いピッチの実現

文における高いピッチの現れを見ると、これまで見てきた例とは異なり、高いピッチの実現のパターンが複数観察される。

- (11) a. ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ⁵
b. ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
c. ナオミガ マフラーオ アンダッジャイヨ

ただし、(11)はそれぞれ自由に交替しているのではなく、文脈によって

⁵ 例文に引かれている上線は高いピッチを表し、下線は低いピッチ、もしくはピッチの下降を表す。例えば、(11b)のピッチは、「ナオミ」で低く「ワ」で高い。その後、再び「マフラー」で低く「オ」で高くなり、その後は文末まで下降する。

許される場合と許されない場合がある。以下では、A 氏の発言に対して B 氏が返答をする、という談話における B 氏の発話を聞き、B 氏の発話に相当する小林方言の形式を a, b, c で記した。

- (12) A: 直美がマフラーを買ったよ
B: (違うよ) 直美はマフラーを編んだんだよ
- a. ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- b. *ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- c. *ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- (13) A: 直美が手袋を編んだよ
B: (違うよ) 直美はマフラーを編んだんだよ
- a. *ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- b. ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- c. *ナオミワ マフラーオ アンダッジャイヨ
- (14) A: 花子がマフラーを編んだよ
B: (違うよ) 直美がマフラーを編んだんだよ
- a. *ナオミガ マフラーオ アンダッジャイヨ
- b. *ナオミガ マフラーオ アンダッジャイヨ
- c. ナオミガ マフラーオ アンダッジャイヨ

以上の例では、高いピッチが実現するのは語彙語の最終音節であり、このことは (7)に矛盾しない。しかしながら、(13b)と (14c)から、全ての語彙語に高いピッチが現れるわけではないことが分かる。この事実を記述するために、「フォーカス」と「DF (domain of focus)」という概念を導入

する。

3 音韻論におけるフォーカス解釈とその領域

文脈によってピッチの様相が変化する、という事実は従来より広く知られている。Truckenbrodt (1995)は、英語におけるストレスの分布を「フォーカス」と「フォーカス解釈の領域」という概念を用いて記述している。これらの概念は、それぞれ Jackendoff (1972)と Rooth (1992)に基づいて仮定されている。

まず始めにこれらの先行研究を概観し、それから、先行研究の仮定に基づき、2.2 節で挙げた小林方言の現象を記述する。

3.1 音韻論と意味論におけるフォーカス解釈 - Jackendoff (1972) -

Jackendoff (1972)は、英語において、文脈によって最も卓立の程度の高いストレス (以下、「最も卓立したストレス」と表現する)の分布が異なる、という現象を観察し、この現象が「フォーカス」という概念を用いた「ストレス指定の原理」によって説明できると主張した。

フォーカスは、Jackendoff (1972)以来、多くの研究者によって統語論的素性であると考えられている。このことは、フォーカス素性を担うのは統語論的要素であることを意味している。

始めに、フォーカスが意味論的に解釈される場合、どのような特徴を持っているのかを見てみる。

- (15) A: John drinks tea.
B: (No,) John drinks COFFEE⁶.

(15)の文脈において、'coffee' は 'tea' と対比されている、と認識するのが最も自然である。Jackendoff (1972)はこのことを捉えるため、対比されている要素、'coffee' が B の文のフォーカスであると考えている。対比されている 'coffee' に関しては 'tea' と同じ事柄 'John drinks X' (ジョンが飲んだ)が考えられている。「同じ事柄」のことを「バックグラウンド⁷」

⁶ 大文字だけで表記された単語に最も卓立したストレスがある。

⁷ Jackendoff (1972)では 'presupposition' という用語が使われているが、論文中の用

と呼ぶ。Jackendoff (1972)は、フォーカスである要素は、それと対比される要素とバックグラウンドを共有するという特徴を持つ、と述べている。

更に、Jackendoff (1972)は、フォーカスは音韻論でも解釈されると指摘している。

(16) A: John drinks tea.(=(15A))

B: *(No,) JOHN drinks coffee.

(15A)に対する返答としては、フォーカスである 'coffee' に最も卓立したストレスがある (15B)は容認されるが、フォーカスではない 'John' に最も卓立したストレスがある (16B)は容認されない。このようなストレスの分布を説明するために、Jackendoff (1972)は以下の原理を提案した。

(17) ストレス指定の原理 (Jackendoff 1972, p. 237, (6.58)に基づく)

文 S において、句 P がフォーカスであれば、S における最も卓立したストレスは P 内にある⁸。

(15)の文脈では、'coffee' がフォーカスなので、(17)によって 'John drinks coffee' における最も卓立したストレスは 'coffee' にあることが予測される。この原理は (16B)は容認されず (15B)が容認されるという事実を説明することができる。

3.2 意味論におけるフォーカス解釈の領域 - Rooth (1992) -

Rooth (1992)は、Jackendoff (1972)より前提とされてきた「フォーカス解釈の領域は文である」ということを認めると説明できない例を示した。そして、フォーカス解釈の領域が文よりも小さいこともある、と主張した。Rooth (1992)は、この領域のことを「フォーカスのスコープ」と名付

語を統一するため、ここでは「バックグラウンド」という用語を用いる。

⁸ Jackendoff (1972)の「ストレス指定の原理」では、どの音節にストレスが指定されるかまで述べられているが、これは本論文と直接関わらないため、割愛する。原文を以下に引用する。

If a phrase P is chosen as the focus of a sentence S, the highest stress in S will be on the syllable of P that is assigned highest stress by the regular stress rule.

けている。

(18) (17)では説明できない例 (Rooth 1992, p. 80, (11)に基づく)

An American farmer was talking to a Canadian farmer ...

上の例では、'American' と 'Canadian' が対比されているにも関わらず、この二つはバックグラウンドを共有していない。

Rooth (1992)は、意味論的なフォーカス解釈の領域が文よりも小さい場合もある、と考えることで 'American' と 'Canadian' の共通のバックグラウンドを捉え、この対比を説明した。(18)では、フォーカス解釈の領域がDPであり、'American' と 'Canadian' は 'a X farmer' というバックグラウンドを共有している、と説明している。

更に、Rooth (1992)は、Jackendoff (1972)が観察したフォーカスの特徴を、フォーカスによって導入される「意味論的要求」として以下のように定式化した。

(19) フォーカスによって導入される意味論的要求 (Rooth 1992, p. 90, (32)に基づく)

- α がフォーカスのスコープであれば、
[[α]]⁰ が α の ordinary semantic value であり、かつ
[[α]]^f が α の focus semantic value であり、かつ
 γ が α と対比される要素である時、
(a) [[α]]⁰ は [[α]]^f に含まれ、かつ
(b) γ は [[α]]^f に含まれ、かつ
(c) γ は [[α]]⁰ と等しくない

(19)に従って、(18)で 'Canadian' と 'American' が適切な対比であることは以下のように説明される。

(20) (18)の説明

- 'a Canadian farmer' がフォーカスのスコープである
[[a [Canadian]F farmer]]⁰ は 'a Canadian farmer' という DP であり
[[a [Canadian]F farmer]]^f は 'a X farmer' という DP の集合である
 γ は 'An American farmer' である
(a) 'a Canadian farmer' は 'a X farmer' に含まれる

- (b) 'An American farmer' は 'a X farmer' に含まれる
- (c) 'An American farmer' は 'a Canadian farmer' と等しくない

(21)の要求を全て満たしているので、'American' と 'Canadian' の対比が適切である。このことは事実と合致する。

もちろん、Jackendoff (1972)が扱ったような、フォーカスのスコープが文である場合もこの意味論的要求に基づいて、対比の適切性が保証される。

(21) (15)の説明

A: John drinks tea.

B: (No,) John drinks COFFEE

'John drinks coffee' がフォーカスのスコープである⁹

[[John drinks [coffee]F]]⁰ は 'John drinks coffee' という命題である

[[John drinks [coffee]F]]^f は 'John drinks X' という命題の集合である

γ は 'John drinks tea' である

- (a) 'John drinks coffee' は 'John drinks X' に含まれる
- (b) 'John drinks tea' は 'John drinks X' に含まれる
- (c) 'John drinks tea' は 'John drinks coffee' と等しくない

以上の例では、(19)の要求を全て満たしているので、'tea' と 'coffee' の対比は適切である。これは事実と合致する。

下の例では、(19b)の要求を満たしていないので、'tea' と 'coffee' の対比は不適切である。これも事実と合致する。

(22) (16)の説明

A: John drinks tea.

B: (No,) JOHN drinks coffee.

'John drinks coffee' がフォーカスのスコープである

⁹ 共に意味論的要求を満たす、'drinks coffee' ではなく 'John drinks coffee' がフォーカスのスコープとなることについては、Rooth (1992)では説明されていない。このことは、Truckenbrodt (1995)が「バックグラウンドは最大でなければならない」ことを規定する制約によって説明しているが、本論ではその議論には言及しない。

ここで言う「意味論におけるフォーカス解釈の領域」とは、Rooth (1992) によって提案された「フォーカスのスコープ」を指している。(24)に基づけば、(23)の例では、DF は文全体ではなく、'An American farmer' と 'a Canadian farmer' である。

Truckenbrodt は、DF という概念を用いて (17)を次のような制約に改定した。

(25) Focus 制約 (Truckenbrodt 1995, p. 165, (18))

F がフォーカスで、DF がその領域であれば、DF 内の最も卓立したストレスは F にある。

(23)では、'An American farmer' と 'a Canadian farmer' それぞれの DF 内で、フォーカスである 'American' と 'Canadian' に最も卓立したストレスがある。このことは (25)の制約を満たしている。(25)は DF の外については何も制限しないので、文全体では 'bar' に最も高いストレスがある、ということとは矛盾しない。

3.4. 小林方言における高いピッチの実現に対する制限

本節では、2.2節で観察した小林方言における現象を「フォーカス」と「DF」を用いて記述する。

(19)に従い、フォーカスと DF を仮定する。フォーカスであるのは統語論的要素であるが、ここでは便宜的にその統語論的要素を含む語彙語を []F で表す。

ピッチの様相を観察すると、フォーカスである要素を含む語彙語でも、それ以外の語彙語と同様に、最後の音節に高いピッチが現れる。しかし、その後の下降がやや遅くなることがある。例えば、(26b)では「マフラーオ」の後ろの「アンダッ」の「ア」までが高くなる。「ナオミワ」の後ろの「マフラーオ」の「マ」ではこのような現象は見られない。ただし、ここでは、これらを区別せずどちらも下線で表す。

(26) a. 「アンダ」がフォーカスである場合 (= (12a))

[ナオミワ マフラーオ [アンダッ]F]DF ジャイヨ

b. 「マフラー」がフォーカスである場合 (=13b))

[ナオミワ [マフラーオ]F アンダッ]DF ジャイヨ

c. 「ナオミ」がフォーカスである場合 (=14c))

[[ナオミガ]F マフラーオ アンダッ]DF ジャイヨ

以上の例は、文中にフォーカスである要素が一つある場合である。次は、一つの文に、二つ以上フォーカスである要素がある場合を観察する。(27)-(29)では、それぞれ提示した発話のみが許される。

(27) 「直美」と「まもる」がフォーカスである場合

A: 花子が次郎にマフラーをあげたよ

B: (違うよ、) 直美がまもるにマフラーをあげたんだよ

[[ナオミガ]F [マモルニ]F マフラーオ クレタッ]DF ジャイヨ

(28) 「直美」と「あげた」がフォーカスである場合

A: 花子がまもるにマフラーを貸したよ

B: (違うよ、) 直美がまもるにマフラーをあげたんだよ

[[ナオミガ]F マモルニ マフラーオ [クレタッ]F]DF ジャイヨ

(29) 「直美」「まもる」「マフラー」がフォーカスである場合

A: 花子が次郎に手袋をあげたよ

B: (違うよ、) 直美がまもるにマフラーをあげたんだよ

[[ナオミガ]F [マモルニ]F [マフラーオ]F クレタッ]DF ジャイヨ

以上の観察より、英語と同様、小林方言においてもフォーカスと高いピッチの実現に関連があることが分かる。それを次のように記述する。

(30) フォーカスの関わる場合の、ピッチの実現に対する制限

Fがフォーカスで、DFがその領域であるとき、Fである統語的

要素を含む語彙語より後（その語彙語自身は含まない）から次の F である要素があればそれまで（その要素自身は含まない）、なければ DF 末までには、高いピッチは実現しない。

(31)に例を挙げ、(30)が具体的にどのようなことを述べているのかを説明する。

(31) (30)を説明するための例

[X 1 [X 2] F X 3 [X 4] F X 5 X 6] DF

X は統語的要素を表している。便宜的に、X は全て語彙語である、とする。

F である X2 を見ると、それより後に F である X4 があるので、X3 では高いピッチが実現しない。次に、F である X4 を見ると、それより後に F である統語的要素がないので、DF 末までにある X5 と X6 では高いピッチが実現しない。

4. 記述の検証

高いピッチの分布を (7)と (30)によって記述した。本節では、この記述が妥当であるかどうか、これまでに挙げていないタイプの例を用いて検証する。

(7)については、高いピッチが「語彙語より小さな要素」や「語彙語より大きな要素」の最終音節で実現すると考えると、事実を正しく記述できないことを示す。同時に、高いピッチは「語彙語」の最終音節で実現する (= (7))とするのが妥当であることを示す。(30)については、一見矛盾しているように思える例があるが、DF の形成に制約を課すことで、そのような例も (30)によって矛盾なく記述できることを示す。

4.1 (7)の検証

4.1.1 「名詞+助詞」の「助詞」がフォーカスである場合¹⁰

語彙語の一部がフォーカスである場合でも、高いピッチは語彙語の最終音節で実現することを示す。

(32) 「まで」がフォーカスである場合

A: まもるが名古屋から走ったよ

B: (違うよ、) まもるは名古屋まで走ったよ

a. [マモルワ ナゴヤ[ズイ]F ハシッタツ]DF オ

b. *[マモルワ ナゴヤ[ズイ]F ハシッタツ]DF オ

たとえ助詞がフォーカスであっても、「ナゴヤ」と「ズイ」のそれぞれの最終音節で高いピッチが実現することはない。高いピッチは、常に「名詞+助詞」という語彙語の最終音節で実現する。このことは、(7)の記述が妥当であることを示している。

4.1.2 統語的複合語の一部がフォーカスである場合¹¹

統語的複合語の一部がフォーカスである場合でも、高いピッチは、複合語の構成要素であるそれぞれの語彙語の最終音節で実現することを示す。

(33) 後部要素「始める」がフォーカスである場合

A: まもるはビールを飲み終えたよ

B: (違うよ、) まもるはビールを飲み始めたよ

a. [マモルワ ビールオ ノン[ハジメタ]F]DF ド

¹⁰ 「名詞」と「助詞」の両方がフォーカスである場合も、高いピッチは「名詞」の最終音節ではなく、「名詞+助詞」という語彙語の最終音節で実現することが予測される。今後の調査で確認する。

¹¹ 「前部要素」と「後部要素」の両方がフォーカスである場合も、高いピッチは語彙的複合語の最終音節ではなく、その構成要素である語彙語の最終音節で実現することが予測される。今後の調査で確認する。

()cv

b. *[マモルワ] ビールオ ノン[ハジメタ]DF ド

()cv

(33b)は複合語の最終音節でのみ高いピッチが実現する例だが、これは許されない。そして、二つの語彙語「飲み」と「始めた」のそれぞれの語彙語の最終音節で高いピッチが実現する (34a)が許される。このことは、(7)の記述が妥当であることを示している。

(35) 前部要素「飲み」がフォーカスである場合

A: まもるはビールを注ぎ始めたよ

B: (違うよ、) まもるはビールを飲み始めたよ

a. [マモルワ] ビールオ [ノン]F ハジメタ]DF ド

()cv

b. *[マモルワ] ビールオ [ノン]F ハジメタ]DF ド

()cv

この場合も、複合語の最終音節でのみ高いピッチが実現している (35b)は許されない。そして、語彙語である「飲み」の最終音節で高いピッチが実現する (35a)が許される。このことは、(7)の記述が妥当であることを示している。また、語彙語である「始めた」に高いピッチが実現しないのは、(30)によって、フォーカスである「飲み」の後では高いピッチの実現が制限されるからである。

4.1.3 名詞句の一部がフォーカスである場合¹²

「名詞句」の一部がフォーカスである場合も、高いピッチは、名詞句の構成要素であるそれぞれの語彙語の最終音節で実現することを示す。

¹² 名詞句全体がフォーカスである場合も、高いピッチは名詞句の最終音節ではなく、その構成要素であるそれぞれの語彙語の最終音節で実現することが予測される。今後の調査で確認する。

まず始めに「まもるのマフラー」という名詞句の一部（「まもる」か「マフラー」）がフォーカスである場合、高いピッチがどのように実現するかを観察する。

(36) 「まもる」がフォーカスである場合

A: 次郎のマフラーは白いよ

B: (違うよ) まもるのマフラーが白いんだよ

a. [[マモルノ]_F マフラーガ シレ]_{DF} ヨ

()_{NP}

b. *[[マモルノ]_F マフラーガ シレ]_{DF} ヨ

()_{NP}

(37) 「マフラー」がフォーカスである場合

A: まもるの手袋は白いよ

B: (違うよ) まもるのマフラーが白いんだよ

a. [マモルノ [マフラーガ]_F シレ]_{DF} ヨ¹³

()_{NP}

b. *マモルノ [マフラーガ]_F シレ]_{DF} ヨ

()_{NP}

次に、「直美が買ったリンゴ」という名詞句の一部（「直美」か「リンゴ」）がフォーカスである場合、高いピッチがどのように実現するかを観察する。

(38) 「直美」がフォーカスである場合

¹³ この文脈において、一人のコンサルタントの発話で「マモルノ」の「ノ」で高いピッチが現れないことがあった。このことは本論文において問題となるが、文脈設定を正確に行った上での更なる調査ができなかったため、本論文では、この発話をデータとして扱わない。

A: 花子買ったリンゴが美味しいよ
B: (違うよ、) 直美買ったリンゴが美味しいよ

a. [[ナオミガ]_F コタ リンゴガ ウンメ]_{DF} ド
()_{NP}

b. *[[ナオミガ]_F コタ リンゴガ ウンメ]_{DF} ド
()_{NP}

(39) 「リンゴ」がフォーカスである場合

A: 直美買ったぶどうが美味しいよ
B: (違うよ、) 直美買ったリンゴが美味しいよ

a. [ナオミガ コタ [リンゴガ]_F ウンメド]_{DF}
()_{NP}

b. *[[ナオミガ]_F コタ リンゴガ ウンメ]_{DF} ド
()_{NP}

(37)-(39)の例において、(b)は高いピッチが「名詞句」の最終音節でのみ実現する例だが、それらは全て許されない。そして、語彙語である要素の最終音節で高いピッチが実現する (a)が許される。このことは、(7)の記述が妥当であることを示している。

4.2 (30)の検証

引用文を含む文のうち、(30)の記述に矛盾しているように見える例がある。本節では、「DFに課される制約」を仮定すれば、そのような例も、(30)に矛盾しないということを示す。

次の例では、共通語の「あげる」に相当する小林方言は「くるい」である¹⁴。また、AとBの発話にある「あんた」(小林方言では「おはん」)

¹⁴ 共通語の「あげる」に相当する小林方言は、「くるい」以外にも「あぐい」がある。目上の者に対しては「あぐい」を使用するのが適当であるが、ここではAとBが友人同士であるという設定をしているので、「くるい」を使用している。

は、B を指している、という状況を設定している。

(40) 「花子」と「マフラー」がフォーカスである場合

A: 直美があんたに手袋をあげるって言ったよ

B: (違うよ)花子が「あんたにマフラーをあげる」って言ったんだよ

a. *[[ハナコガ]_F オハンニ [マフラーオ]_F クルッチュータ]_{DF} ヨ

b. [[ハナコガ]_F オハンニ [マフラーオ]_F クルッチュータ]_{DF} ヨ

フォーカスである「ハナコ」の後であるにも関わらず、「オハンニ」の「ニ」で高いピッチが実現している。このことは一見すると (30)の記述に矛盾するように思える。この問題は、DF が文全体ではなく、次のように形成されていると仮定することによって解消される。

(41) 二つの DF¹⁵

a. [[ハナコガ]_F ユータ]_{DF}

b. [オハンニ [マフラーオ]_F クル]_{DF}

(41)では、「オハンニ」はフォーカスである「ハナコ」の後にあることにはならない。従って、「オハンニ」で高いピッチが実現することは (30)の記述に矛盾しない。

DF が(40)ではなく(41)であることは、DF に課せられる制約として (42)を仮定することで保証する。これはフォーカスのスコープ (意味論におけるフォーカス解釈の領域)には何も言及しない。あくまでも DF (音韻論

¹⁵ 査読者からは、以下のような「開始点は異なるが、終点は同じ」である 2 つの DF が形成されていると仮定することも可能だろうとの指摘を受けた。

【 [ハナコガ]_F [オハンニ [マフラーオ]_{F2} クルッチュータ]_{DF1, DF2} 】
このように仮定した上で、「オハンニ」の前にある DF2 の開始点で、フォーカスの後ろの高いピッチの低下がリセットされる、という考え方である。

今後、査読者からの代案を受け入れた場合、「高いピッチの低下がリセットされる」ということが (30)とどのように関連付けて説明できるのかを考えたい。

におけるフォーカス解釈の領域)についての制約である。なお、この制約は、Truckenbrodt (1995)の (24)に矛盾するものではない。

(42) DF に課される制約¹⁶

二つ以上のフォーカスが異なる発話レベルにある場合、DF はそれぞれの発話レベルにおいて形成される

B の発話における「あんたにマフラーをあげる」という部分は直接引用である。一般に直接引用の部分は、「花子が言った」とは発話レベルが異なると考えられている。この場合、(42)に従い (41)のように DF が形成される。

以上のように、DF に課される制約を仮定することで、一見 (30)に矛盾するように思える例も、他の例と平行的に記述することができる。

一方、間接引用の場合は発話レベルが同一であるので、(42)に言及されない。(43)では、「あんた」と「あたし」が同一人物を指している。

(43) 「直美」と「マフラー」がフォーカスである場合

A: 花子があんたに手袋をあげるって言ったよ

B: (違うよ、) 直美があたしにマフラーをあげるって言ったんだよ

a. [[ナオミガ]_F アタイニ [マフラーオ]_F クルツチュータ]_{DF} ヨ

b. *[[ナオミガ]_F アタイニ [マフラーオ]_F クルツチュータ]_{DF} ヨ

また、直接引用文が含まれている文でも、フォーカスである要素が一つである場合は (42)の条件を満たさないので、DF の形成については何も言及されない。

(44) 「直美」がフォーカスである場合

A: 花子がまもるが飲んだって言ってるよ

B: (違うよ、) 直美がまもるが飲んだって言ってるよ

¹⁶ 発話レベルの違いが音韻規則の適用に關与する、ということが、久保 (1990)で既に指摘されている。

a. [[ナオミガ]F マモルガ ノンダチ ユーチョッ]DF ド

b. *[[ナオミガ]F マモルガ ノンダチ ユーチョッ]DF ド

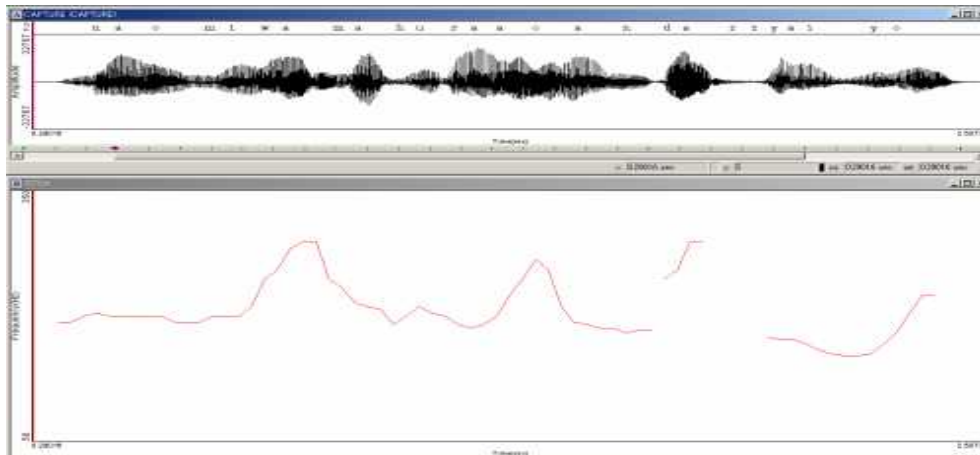
4.3 おわりに

本論文では、小林方言における高いピッチの分布を (7)、(30)のように記述した。そして、4.1 節と 4.2 節において、これらの記述が妥当であることを示した。

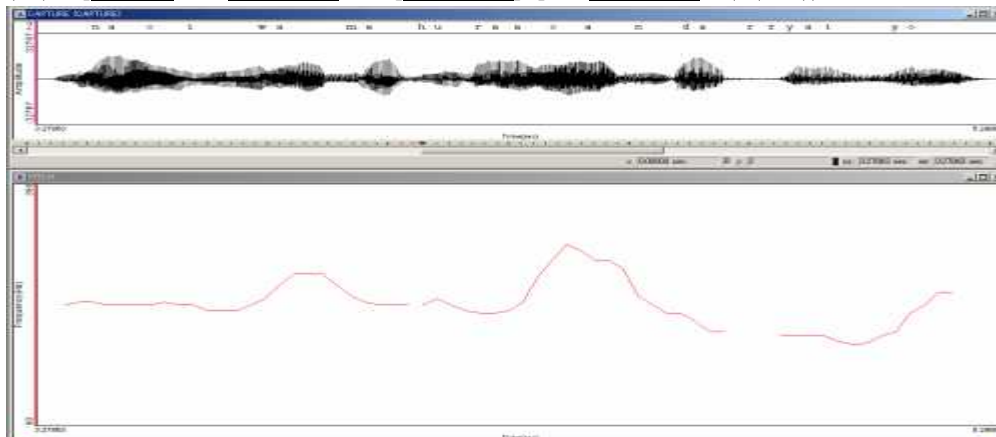
今後は、更なるデータを用いて、記述の妥当性を検討したい。脚注 13 で書いたように、コンサルタントの一人から、(7)の記述に対して問題となる発話が観察されている。文脈設定を正確に行い、調査を進める必要がある。また、複合語について、本論文で取り上げた例は、二つの要素から成るものに限られている。三つ以上の要素から成るものであっても (7)によって正しく記述できるかどうかを確認しなければならない。更に、フォーカスの関わる現象に関しては、調査すべきことが多く残っている。今後も小林方言の調査を続け、より多くの現象の観察に基づいて、「一型アクセント」がどのように実現するのかを考察したい。

音声波形とF0

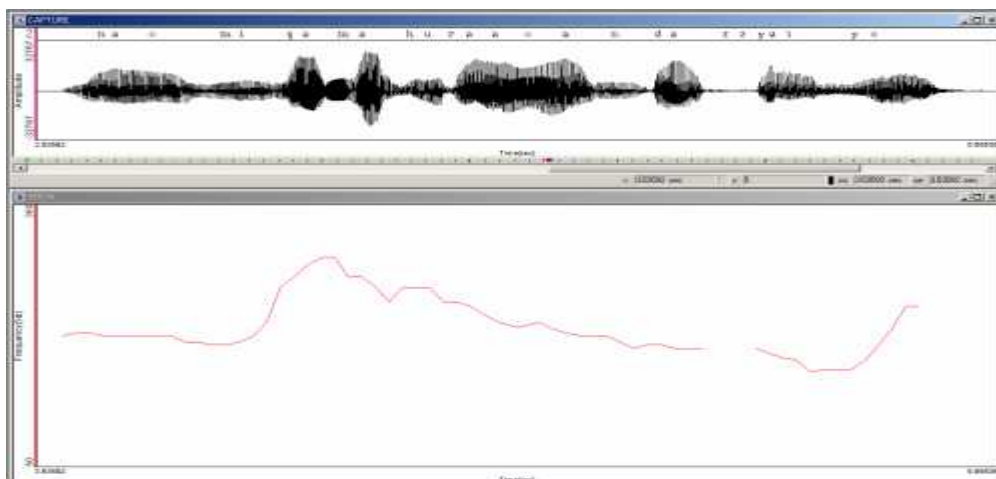
(45) [ナオミワ マフラーオ [アンダッ]F]DF ジャイヨ (=26a))



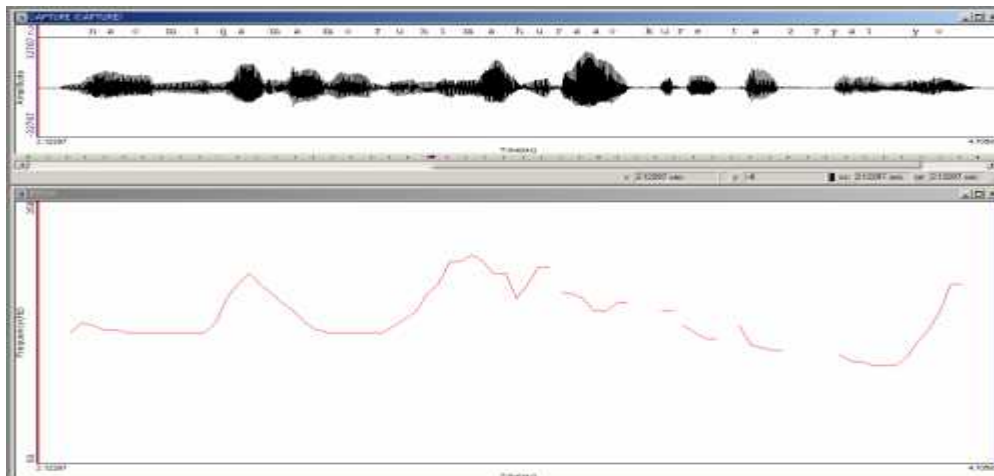
(46) [ナオミワ マフラーオ [アンダッ]F]DF ジャイヨ (=26b))



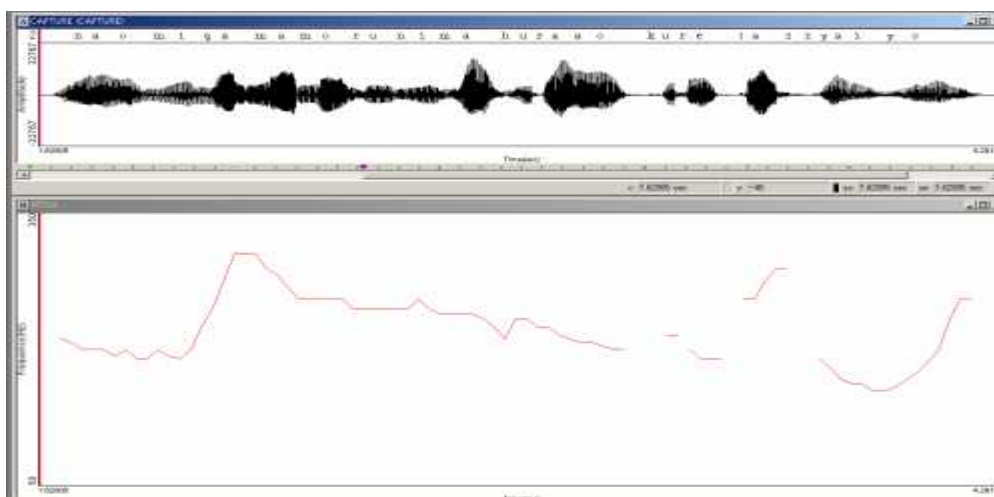
(47) [[ナオミガ]F マフラーオ アンダッ]DF ジャイヨ (=26c))



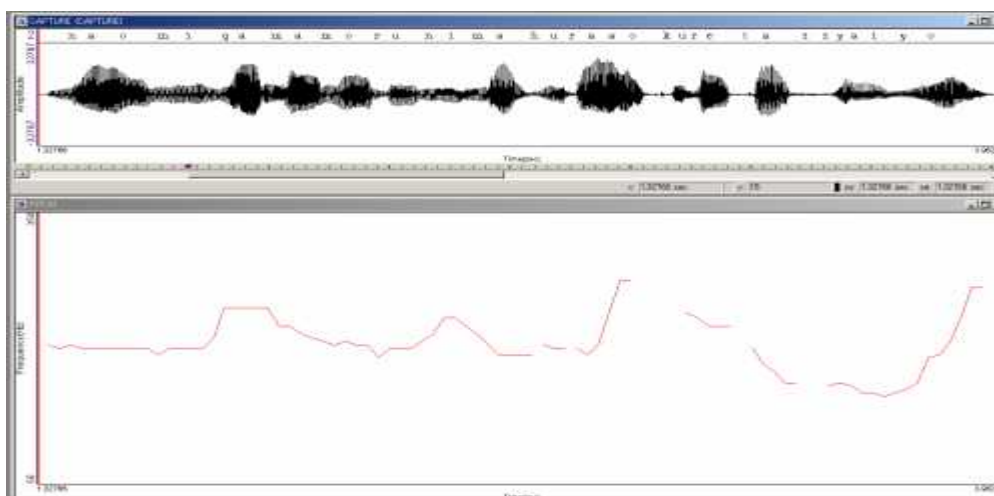
(48) [[ナオミガ]F [マモルニ]F マフラーオ クレタツ]DF ジャイヨ (=27)



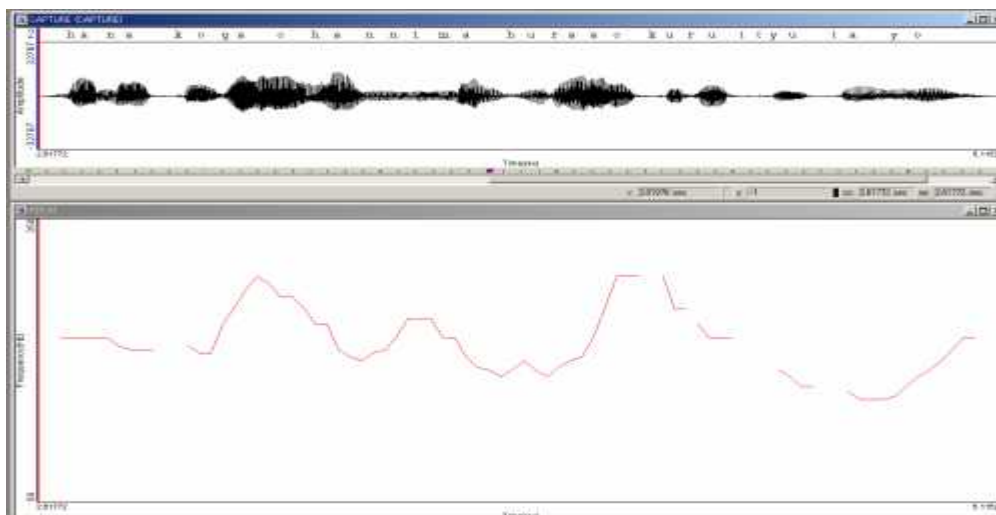
(49) [[ナオミガ]F マモルニ マフラーオ [クレタツ]F]DF ジャイヨ (=28)



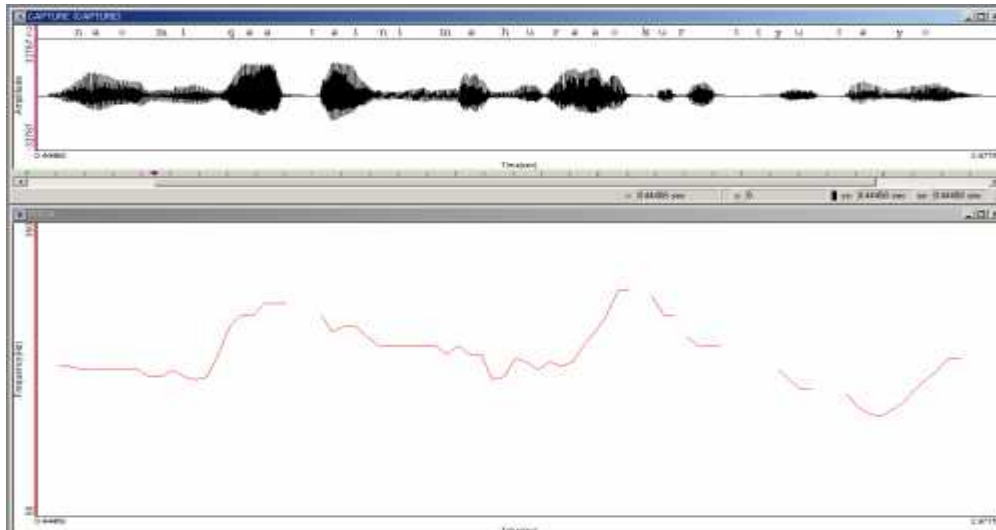
(50) [[ナオミガ]F [マモルニ]F [マフラーオ]F クレタツ]DF ジャイヨ (=29)



(51) [[ハナヨガ]F オハンニ [マフラーオ]F クルツチャータ]DFヨ (=40b)



(52) [[ナオミガ]F アタイニ [マフラーオ]F クルツチャータ]DFヨ (=43a)



謝辞

本稿を執筆するにあたり、指導教員である九州大学の久保智之先生をはじめ、菅豊彦先生、稲田俊明先生、坂本勉先生、上山あゆみ先生には大変熱心な指導をしていただいた。また、二名の匿名査読者からも貴重なご意見を伺うことができた。査読者が提供して下さった音声データは興味深く、今後の研究に大変有益な情報となった。そして、言語データを提供して下さったコンサルタントの永田トシ氏、堀緑氏、快く調査に協力して下さった森岡正英氏、堀龍紀氏、堀照代氏、小園敏文氏、荒武征樹氏、荒武祐介氏、荒武敦子氏、小林市社会福祉協議会の皆様に、心からお礼を申し上げたい。本稿の誤りは全て著者の責任である。

最後に、昨春退職なさった菅豊彦先生からは、授業を通じて非常に多くのことを学ばせていただいた。ここに深く感謝したい。

参考文献

- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic interpretation in generative grammar*. MA: MIT Press.
- 久保智之 (1990) 「福岡市方言の疑問詞表現のアクセント規則」 『九大言語学研究室報告』 11: 103-118
- 益岡隆志、田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』 東京: くろしお出版
- Rooth, Mats (1992) A theory of focus interpretation. *Natural language semantics* 1.1: 75-116.
- Truckenbrodt, Hubert (1995) *Phonological phrase: their relation to syntax, focus, and prominence*. Doctoral dissertation, MIT.

Phonetic Realization of the ‘ikkei’ (fixed) accent in the Kobayashi dialect

Kumiko SATOU
(Kyushu University)

This paper discusses how the so called ‘ikkei’ (fixed) accent is realized in the Kobayashi dialect. This dialect is characterized by the high pitch of the last syllable of nouns (including enclitics that follows), adverbs, verbs and adjectives.

This paper shows that even within these categories, there are cases that the high pitch does not appear. The concepts of ‘focus’ and ‘domain of focus’ (DF) are used to describe this phenomenon.